

第7回世界遺産学習全国サミット in ひらいずみ 参加概要報告

奈良市立平城小学校 新宮 済

1. はじめに

第7回世界遺産学習全国サミット in ひらいずみ は11月5日、平泉町の平泉小学校で開催された。同サミットは2010年に始まり、第5回までは奈良市で開催され、第6回が大牟田市で開催された。今回の平泉は東日本で開催される初めてのサミットとなり、世界遺産があるまちに住む児童生徒や教育関係者約500人が全国から集まった。参加者は、実践発表などを通じ、世界遺産だけではなく地域の伝統文化や文化財、遺跡、自然景観の保護保全や価値継承に向けた取り組みの在り方を学び合った。サミットにはコンソーシアムの教員を代表して参加させていただいた。この学びを職場やコンソーシアムで共有するために、以下サミットを通じて得た、世界遺産学習・ESDにおける最新の情報や、現場に役立つ情報を中心にまとめていく。

2. 第7分科会「ESD」のキーワードはコンソーシアムとの連携

サミットの記念講演を行った木曾功先生が話されたなかに「グローバル人材の育成に向けたESDの推進事業のコンソーシアム」が取り上げられた。今回の世界遺産学習全国サミットの分科会のキーワードはまさにコンソーシアムとの連携であった。現在、奈良ESDコンソーシアムは、「学びのプラットフォーム」という奈良教育大学と行政と県内の公立学校と博物館が共同して授業をつくり質の高い実践を行っている。ここでは専門機関の学芸員が教員の教材研究を専門的な知識の面で支え、教員が子どもの主体的な学びをコーディネートし指導案をつくる。この指導案をコンソーシアムの構成員で指導案検討を行う。大学教員からはESDの理論と豊富な経験を、現場教員からは実践を往還させることで、より良い実践を行うことできる。また、指導案検討に関わった教員自身の実践力の向上につながる。この「学びのプラットフォーム」でつくられた東北の実践が全国ESD実践大賞に輝き、世界遺産学習サミットでも取り上げられたことで、多くの参加者の関心を集めた。

第7分科会はESD/ユネスコスクール・東北コンソーシアムによる「学びのプラットフォーム」で作られたからこそ実現できた実践であった。「学びのプラットフォーム」により気仙沼市立馬籠小学校は世界遺産学習に「馬籠風土研究会」という地域人材を学習に結びつけた。また、「学びのプラットフォーム」により福島県南会津郡只見町立朝日小学校はユネスコスクールとして始まったばかりで教師の移動も激しい現場の実践力を短期間で養いそれを維持していた。

質疑応答では、全国の自治体やNPO関係機関からの、学びのコーディネートの仕方についての質問が多く出されたが、報告者だけでなくコンソーシアムのメンバーが報告者の代わりに答える姿が印象的であった。また「学びのプラットフォーム」への参加の仕方についての質問も多く出て、参加者のコンソーシアムへの興味関心が高いことが伺えた。実践報告者の東北コンソーシアムと連携したからこそESDを実現できていると語っていた。現在

の自分が奈良 ESD コンソーシアムの元で学び、共同して授業開発し実践できる環境が恵まれていることに気付けた。

3. 指導助言からみる、教師の実践づくりのポイント

日本ユネスコ国内委員である及川幸彦氏の指導助言を聞きに多くの実践家が集まっていた。助言のなかで今後実践をつくり出していくポイントをいくつか話された。その内容は実践を理論化したものであり、これは明日の現場の実践にすぐに役立つ情報であり、還元すべき情報であった。助言で話されたことを、記録として以下にまとめる。

【発表実践の優れている点】

馬籠の実践は、市や県を超えた広い学びとしての ESD を立証したことに価値がある。学校があるのは宮城県であるが、平泉の黄金文化を教材にし、気仙沼市の馬籠の砂金が三陸地方の金が平泉の黄金文化を支えていくことを学び、岩手県にある世界遺産平泉子どもたちがつながる実践を行った。これにより子どもたちの自己肯定感が生まれ郷土愛へと繋がっていく。この実践を支えているのは地域のリソースであり風土研究会である。風土研究会が地域の砂金の歴史を掘り起こし、それを守り孫に伝えていたからである。「風土研究会が掘り起こし、それを守り伝えること」それ自体が ESD として価値がある。そのような地域にある大人の ESD を学校がサポートしたという立場なのである。地域の世代間で価値を共有するために教員がコーディネーターとなる必要がある。その役割は3つある。1つは、教え導く立場（インストラクター）であること。2つは、専門家の専門的な用語の難しさを通訳する立場（トランスレーター）である。3つは、子どもが自発的に課題を持ち学ぶ学習展開をつくりそれを支える（ファシリテーター）である。この3つは ESD に限らずこれからの教員は持たなければならない。

これからの学習は学びのストーリーがポイントとなる。必然性のある学びのストーリーが大切であり、これがないと子どもにも残っていかないし、学校カリキュラムとしてのこらない。今回の馬籠でいえば、「馬籠の金が平泉を支えた」ということがストーリーとしてつながる。やはりこれにはロマンもあるのである。ロマンのあるストーリーをつくることで子どもの学びに火がつく。今後、地域遺産を伝えていくためには方法として2つある。1つは、素晴らしい馬籠の実践を、他の学校のある学年のある単元に入れていくこと、これは学校の責務である。これは統合という視点でのカリキュラムマネジメントの1つである。2つはこれを公民館の連携として生涯教育、社会教育として残し続けていくことである。

【今後も実践をしていく教員や社会教育者へアドバイス】

今回馬籠がユネスコスクール実践大賞に選ばれた視点から述べていく。これからの実践は活動ベースから子どもの変容や姿を全面的に出す中身にしていく必要がある。活動も質

が大切であり、子ども主体であり体験的かつ探求的であることが必要である。伝達にならないように気をつけていかなければならない。

只見町は「学ぶストーリーを立てたカリキュラム」と推進体制（地域との連携）の両輪で実践を支えたことが素晴らしい点である。さらにESDで育成すべき能力を明確化し保護者への説明責任に答えている。また観点が明確化学年で具体化して取り組んでいる。人・もの・ことを中心につなぐ視点を大切に連続的な学びを、という教育の流れを踏まえてアクティブラーニングをつくっている。さらに、この学びが、子どもたちなりの発信という行動化に結びつけている。地域の参画という広い視点を持って実践をすることが大切である。

【二つの取り組みを比較して今後期待したいこと】

三陸ジオパークと世界遺産とユネスコスクールを掛け合わせた実践、ユネスコエコパークとユネスコスクールを掛け合わせた実践である。このようなものを教育のリソースとして使って欲しい。ESDの取り組みの持続をしていくために3つを意識する必要がある。それは、カリキュラムをしっかりとすること、それを支える地域・研究会との連携を行うこと（転勤した教員の地域学習を支える）、行政の支援を充実させることである。その意味で今回の実践がESDを活性化すると同時に、ESDの持続可能性の担保の側面を意識して取り組んでほしい。今回の実践づくりのキーワードは「地域」であり、環境教育でつかう4つの段階と究極の目標がある。1つは、地域に親しむ(体験・遊び)という段階から始めることである。2つは、地域を知る(知識・理解)ことである。3つは地域を活かす(学び・発信すること)つまり、地域を活性化させることである。4つは、地域を守っていく(地域の可能性を考える)ことである。4つの段階からさらに、地域に住む子ども・大人が地域と共生していく「地域創成」へとつながる。住む人が主役、誇りを持って自己肯定感のある学びをつくっていくべきである。今回の実践はESD東北コンソーシアムが連携した。良い実践を比較しあいながらESD情報や学びも共有できるのがコンソーシアムのメリットである。現在もたくさんの機関が東北コンソーシアムに加入していることから、東北でも注目されている。2つの取り組みが、他の地域に繋がっていくように、それは世界遺産だけがすべてではなく、地域にある光にあっていない遺産も含めてESDと考えて実践をしてほしい。

4. 世界遺産学習実践発表から見えた子どもの姿

【岩手県釜石市立釜石東中学校鉄の都「釜石」～未来へ残そう 釜石の宝～】

世界遺産に認定された鉱炉を地域教材に、釜石の製鉄業をささえた先人の功績を学び、大島高任の意思を新日鉄釜石が意思をつなげていく。日本の製鉄が釜石から始まったことに誇りを持ちこの町の宝を鉄の都「釜石」として未来に残そうとする。震災で流されたも

ののなかから新しい宝をみつけだす希望をつくる教材を通した授業をしていることを誇りにもつ子どもたちの姿があった。

【能の坂戸座が生まれたのが斑鳩小学校】

3年生は、授業において受け継がれてきた能を学習すると共に、クラブ活動の時間に能クラブとして学び、地域のお祭りなどで披露する。子どもたちの能には、不思議と心を打つものがあった。これを研究者達は、能の文化を、受け継いできた人々が能を舞う子どもたちの後ろに浮きあがるかのような、つながりを感じると表現していた。能の教材化の可能性に気付かされた。